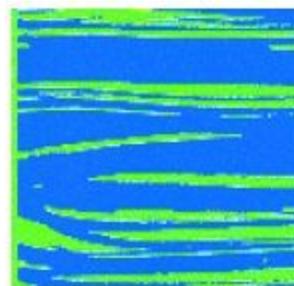


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース



2010年 冬号 No.61 (2011年3月2日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX: 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

連載: いま、こんな研究会しています(3) 人間行動分析研究会のこと…………… 伊藤正人

連載: いま、こんな研究しています(14) 強化の原理の解明を目指して…………… 丹野貴行

連載: 海外で学ぶ学生、海外で働く専門職(8) アメリカ留学とその後…………… 斉藤真耶

自著を語る『人は、なぜ約束の時間に遅れるのか 素朴な疑問から考える「行動の原因」』

…………… 島宗 理

「日本在住学生会員の ABAA/SQAB 参加に対する助成事業」…………… 広報委員会

編集後記…………… ニュースレター編集部

<連載: いま、こんな研究会しています(3)>

人間行動分析研究会のこと

伊藤正人

(大阪市立大学)

人間行動分析研究会は、毎年1回の例会を開催し、本年(2011年)3月25日の例会で16回目を迎えます。この会は、1993年12月18日に、大阪市大において、伊藤と、故桑田繁、大河内浩人(大阪教育大)の3名がヒトを対象とした行動分析的研究を発表したことから始まりました。そもそも3名がこのような研究会を始めた目的は、当時まだ十分ではなかった(現在でも十分ではありませんが)、ヒトを対象とした基礎研究を促進させようということにありました。そのときの発表題目は、各人の関心の有り様を

映しているようで興味深いので、ここで紹介してみましよう。「人間の FI スケジュールパフォーマンスに及ぼす反応コストの履歴効果」(大河内)、「ヒトの言語行動と非言語行動の機能的関係に関する実験的研究」(桑田)、「ヒトの選択行動におけるセルフコントロールと衝動性: 強化量と強化の遅延時間は如何に関係するか」(伊藤)。

こうして始まった例会は、私たち3名(桑田君が志半ばで天逝してしまったことは、返すかえすも残念なことでしたが)だけではなく、現

在、関西地区の大学で指導的立場にある、長谷川芳典、藤健一、武藤崇、吉野俊彦の皆さんを始め、大阪市大や大阪教育大の若い研究者を中心に、広く関西地区の若手研究者に研究発表の場を提供し、情報交換や懇親の機会を通して、研究活動の促進に一定の貢献をしてきました。また、国内だけではなく、海外からの研究者(Dr. Bragason, アイスランド)や心理学以外の分野、例えば、看護学、哲学からの研究発表もあり、さらに、ヒトを対象とした研究だけではなく、動物を対象とした研究発表もあり、発表者も発表内容も多彩なものになっているといえるでしょう。

これまで明文化された運営体制もないまま長らく伊藤が研究会の世話役を務めてきましたが、昨年、研究会の運営体制を見直し、新たに大河

内浩人さんを会長に、関西地区の指導的立場にある方々10名による評議員会を設け、研究会の運営体制を整備して再出発することになりました。これからは、これまで以上に研究会活動が活発になり、関西ばかりではなく、全国的な視野に立って初期の目的が達成されることが期待されます。最後に、研究会組織をあげておきます。

会長：大河内浩人（大阪教育大）、**幹事**：佐伯大輔（大阪市大）

評議員：青山謙二郎（同志社大）、藤健一（立命館大）、長谷川芳典（岡山大）、伊藤正人（大阪市大）、武藤崇（同志社大）、中島定彦（関西学院大）、嶋崎まゆみ（兵庫教育大）、嶋崎恒雄（関西学院大）、山下博志（大阪学院大）、吉野俊彦（神戸親和女子大）

<連載：いま、こんな研究しています (14)>

強化の原理の解明を目指して

丹野貴行

(慶應義塾大学先導研究センター研究員)

慶應義塾大学先導研究センター研究員の丹野と申します。まずは今回このニューズレターに寄稿の機会を与えていただいたニューズレター編集部の方々にこの場を借りて感謝を申し上げます。

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。私は中学卒業後に福島工業高等専門学校土木工学科に進学し、構造力学、水理学、コンクリート工学、測量といった科目を学びました。しかしこれら土木工学にはどうしても興味がわかず進路を迷っていたところ、偶然そのときに読んでいた心理学の一般書に感銘を受け、心理学を志して駒澤大学文学部心理学科に編入しました。駒澤大学に入学後、当時の私にとっての心理学とはフロイトやユングであったためそれらの勉

強ばかりしていましたが、工学出身の私にとっては徐々にしっくりこない部分が目立ちはじめ、心理学への興味を失いかけてしまいました。しかし小野浩一先生の学習心理学の講義を受けたことで自分が心理学に求めていたこととは行動分析学なのだ気づくことができ、その後は慶應義塾大学大学院に進学し、坂上貴之先生の下でこれまで研究を続けさせてもらっています。

さて、大学院入学後これまで一貫して行ってきた研究は「強化の原理の解明」です。強化するほど反応が生起しやすくなる（効果の法則）ことは周知の事実ですが、いったい何がどうなるとどの程度増加するのでしょうか。また、強化スケジュールが異なることによっても反応率（反応数/単位時間）は増減します。例えば、

強化率（強化数／単位時間）を等しくした変動比率（VR）スケジュールと変動時隔（VI）スケジュールでは、前者でより高反応率が確認されます（丹野・坂上，2005，2011）。ではこの2つの現象の関係をどのように理解したら良いのでしょうか。以下は私と坂上先生、それに Alan Silberberg との共同研究から得られた1つの説を紹介させていただきます。

まずスケジュールの効果ですが、鍵はどうかや反応 - 強化間の接近性にあるようです。VI スケジュールとそれに高反応率強化スケジュールを連結させた場合を比較すると、両スケジュールの強化率を等しくしたとしても後者でより高い反応率が得られました（Tanno & Sakagami, 2008）。また強化直前の自分の行動に基づきこれらのスケジュールを弁別できることも確認されました（Silberberg, Goto, Hachiga, & Tanno, 2008; Tanno, Silberberg, & Sakagami, 2009）。これらの結果から、少なくとも変動スケジュール下においては、スケジュールがもたらす効果は強化直前の出来事に強く影響を受けていることが示唆されます。

ではこれと、強化するほど反応が生じやすくなるということとの関係をどのように考えたら良いのでしょうか。Tanno, Silberberg, and Sakagami (2010) は、VI スケジュールを2つ並べた並立 VI VI スケジュールにおいて、2選択肢の間の強化割合を一定に保ちつつ、一方の選択肢のスケジュールを VR や連結 VI DRH スケジュールへと変化させてみました。すると、そのスケジュールを変化させた選択肢に対する時間配分には変化が見られなかったのですが、その時間配分内における反応の速さ（局所反応率）は VR や連結 VI DRH スケジュールで高くなりました。この結果は、強化はその直前の行動の時間配分を増加させ、また強化スケジュールはその時間配分内における反応率に影響することを示しています。

整理しましょう。問題は、(A) 強化するほど反応が起きやすくなる、(B) しかしスケジュー

ルによっても反応率は変化する、(C) 何がどうなってそのような効果が得られるのか、この3点でした。これに対し我々の研究から、(a) 強化はその対象となる行動への時間配分に影響する、(b) 強化スケジュールはその時間配分内の反応率に影響する、という2つの機構があるという説にたどりつきました。またその両方の機構にとって (c) 反応 - 強化間の接近性が重要である、ことも示唆されました。

ではこの3つの単純な仮定だけで本当に強化スケジュール下での行動を説明できるのでしょうか。最近我々はこれを試みた Copyist モデルを提案しました（Tanno & Silberberg, submitted）。Copyist モデルは簡単に言うと次のような機構になります。まず入力ですが、強化があった時点でその強化間間隔中に出現していたすべての反応間時間（IRT）に対し、強化からの時間的距離に応じて負の指数分布の重みづけがなされます。強化直前ほど重みを高くすることで反応 - 強化間の接近性の役割を表現する訳です。そしてその重みづけ平均値を、例えば最近の300個分記憶させておきます。次に出力では、その記憶の中から1つのIRTが抽出されます。しかしその抽出方法は無作為ではなく、例えば2秒のIRTは4秒のIRTよりも2倍抽出されやすいとすることで、強化が等しく時間配分に影響するということを反映させます。このモデルのシミュレーションを様々な変動スケジュールで行い、先行研究のデータと対応させたのが図1です。横軸はモデルからの予測値、縦軸は先行研究での実測値、斜め線は予測値と実測値が一致する場合を示していますが、多くのデータ点がこの線上に位置し、0.91という高い説明率が得られました。

今後はこの Copyist モデルによって行動の獲得段階を説明できるのかどうか、あるいはここでは紹介しませんでした、反応 - 強化間の接近性だけでは説明できない諸事実とどのように整合性をつけるかといったことを検討していきたいと考えております。その成果は随時日本行

動分析学会年次大会や行動数理研究会などで報告させていただきますので、その節は皆様に色々のご助言をいただければ幸いです。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

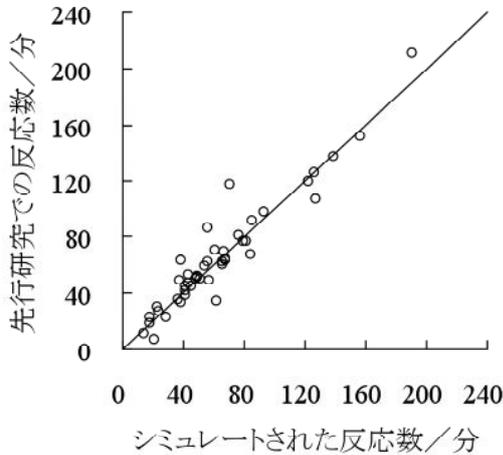


図1 Copyist model の結果 Tanno and Silberberg (submitted) より改変

引用文献

Silberberg, A., Goto, K., Hachiga, Y., & Tanno, T. (2008). Schedule discrimination in a mixed schedule: implications for models of the variable-ratio, variable-interval rate difference. *Behavioural Processes*, 78, 10-16.

丹野貴行・坂上貴之 (2005). 変動比率強化

スケジュールと変動時隔強化スケジュールの間の反応遂行の違い 心理学評論, 48, 186-206.

Tanno, T., & Sakagami, T. (2008). On the primacy of molecular processes in determining response rates under variable-ratio and variable-interval schedules. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 89, 5-14.

丹野貴行・坂上貴之 (2011). 行動分析学における微視 - 巨視論争の整理—強化の原理、分析レベル、行動主義への分類— 行動分析学研究, 25, 109-126.

Tanno, T., Silberberg, A. A copyist model of response emission. Submitted.

Tanno, T., Silberberg, A., & Sakagami, T. (2009). Single-sample discrimination of different schedules' reinforced interresponse times. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 91, 157-167.

Tanno, T., Silberberg, A., & Sakagami, T. (2010). Concurrent VR VI schedules: Primacy of molar control of preference and molecular control of response rates. *Learning & Behavior*, 38, 382-393.

<連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職 (8)>

アメリカ留学とその後

斉藤真耶

(Creative Behavioral Consultants, Inc.)

私は現在、LA 近郊にある自閉症児センターでシニアケーススーパーバイザーとして働いてま

す。このセンターでは、主に3歳～11歳の自閉症児の家にアウトバウンド、DTT (Discrete Trial

Training) を始めとする ABA とペアレントトレーニングを週 6 時間～40 時間ほど行っています。2 年前に LA に引っ越してきたのですが、それまではイリノイ州にある Southern Illinois University (SIU) で大学・大学院時代を過ごしました。

障害を持った人が身近にいたせいか、小さい頃から漠然と将来は障害児・者に関わる仕事をしたいと考えていました。高校 2 年の進路を決める際、福祉に関しては日本よりアメリカの方が進んでいると知り、アメリカに留学する事に決めました。それからは、「アメリカの大学は受験勉強もしなくていい上に、英語で勉強すれば英語もしゃべれるようになるし一石二鳥だ！英語も向こうにいったから勉強する！」と、部活にバイトに明け暮れる高校生活を送りました。今思えば、なんて短絡的な考えだったんだろうと自分でも情けなくなりますが、そんな考えだったからこそ何も恐れることなく留学することができたのかもしれません。

もちろん外国での生活は私が想像していたような生優しいものではなく、最初は簡単な単語すら聞き取れず、現地の食生活にも慣れず、毎日のように「日本へ帰りたい」と思っていました。半年ほど語学学校で英語を勉強した後、日本へ帰る選択肢もあったのですが、「アメリカの大学はどんな感じなんだろう、とりあえずやってみよう」という気持ちでリハビリテーションサービス学部へ進学しました。そこでは、精神・発達・身体障害全般、米国福祉法、ABA 入門クラスなど、福祉に関する様々な事を幅広く勉強しました。

どうにかこうにか、あと半年間の実習が終われば無事大学を卒業できるというところまで来た頃、まだ卒業後の進路が決まっていなかった私は、学部の進路アドバイザーのところへ相談

に行ったのですが、そこである教授を紹介されました。それが SIU の行動分析・療法 (Behavior Analysis and Therapy Program; BAT) の学部長である Mark Dixon 先生でした。それまでに先生のクラスをいくつか取ったことがあったので先生の事は知っていたのですが、「あの先生か・・・」という重い足取りで先生に会いに行ったのを今でも覚えています (先生は厳しくて有名だったのです)。実際会ってみると、行動分析が様々な分野に取り入れられていて成果を収めているという話をはじめ、さらには BAT への進学を勧められました。その時の私は、ABA 入門クラスで成績をとるのに苦労し、ABA に対しあまりいい思い出がなかったためあいまいな返事しかしなかったのですが、後日私の知らぬ間に実習先が当初の予定だった老人ホームから、先生の管轄下である脳障害者のグループホームへと変更されていたのです。正直に言ってこの時点では、BAT に進学するつもりは全くなく、無事に実習を終えてとにかく卒業できればいいと思っていました。

新学期になり、不安な気持ちを抱きつつも実習が始まりました。それまで日本文化や日本語に興味のあるアメリカ人とは関わりがあったものの、リアルアメリカ人 (海苔を食べ物と知りびっくりしたり、「日本の通貨はユーロなんでしょ?」と真剣に聞いてくるぐらい他国に関しては無知なアメリカ人) との生活にどっぷりかつかった事がそれまでなかった私は、慣れるまでとても不安でした。そのグループホームには、事故や病気による脳障害をもつ児童から成人の入居者がおり、入居者だけで 100 人近く、スタッフも 200 人近くいる大きな施設でした。町のいろいろな場所にその施設が管轄する家が 20 軒ほどあり、約 4～10 人の入居者が各家に住んでいました。

スタッフの中には全部で3つのチームがあり、私が割り当てられたのは問題行動と記憶障害が一番激しい症状の成人を担当しているチームでした。このチームが担当する家は、基本的に外と繋がるドアは終日ロックされているのですが、その中でも一番嚴重な建物では、入り口が二重のドアでロックされていて、建物内に入ると1個1個のドアがスタッフの監視ルームから遠隔ロックできるという、映画に出てくる精神病院のような構造でした。その一番嚴重な家には、脳障害を持っているために刑務所での服役を免除され特別に入居を許可された人や、イラクやアフガニスタンに派遣され現地で脳障害を負った上に、PTSDなどを抱えた暴力的な帰還兵など、様々な問題行動を抱える人々が住んでいました。その家で働いている時は、常にフットボール選手のような大きな体格の男性スタッフが万が一に備え付き添ってくれるなど、当初の予想を超えた実習となりました。

また、1ヶ月ほど過ぎ実習にも慣れてきた頃には、行動療法士の人に付きアシスタントとして働くようになりました。中でも印象に残っているのが、理学療法を嫌がる入居者さんに、ABAを使って少しでもリハビリのトレーニング量を増やそうというものでした。これまでも、多くの入居者が理学療法を必要としているにも関わらず、トレーニングに伴う痛みのために暴力的になったり、トレーニングから逃げ出したりという問題を抱えていました。そこでDixon先生指導の下、Larger-delay reinforcer と Smaller-immediate reinforcer を使い Self-Control Training を行いました。その結果、数週間後には、その入居者はリハビリを嫌がりはするものの順調にトレーニング量が増え、問題行動の頻度も少なくなっていたのです。またその施設では、入居者の機能レベルに応じ

て、日常的に Level System や Behavior Contract も使われており、実践的に使われている ABA を実際に見て経験する事ができました。このように、入居者さん達の変化を目の当たりするにつれて「ABA 勉強してみたいな」という気持ちが大きくなり、実習が終わる前には BAT に申し込んでいました。

運よく SIU の BAT に入学できたのも束の間、院生活を始めてみると学部時代とは全く比べ物にならない量の読み物や提出物、グループホームでのアシスタントシップに驚く余裕もなく、学校、仕事先、家、学校、仕事先、家のローテーションの毎日でした。最初の一年は本当に大変でしたが、2年目になると同じグループホームの児童チーム（18歳以下の脳障害児）での実習、公立幼稚園で高機能発達障害児への ABA サポートや、いくつかのリサーチに参加させてもらったりと、より実践的な事をさせてもらうようになりました。また、修士論文では Dixon 先生指導の下で3歳から5歳の健常児に対して Self-Control Training を行い、充実した2年間の大学院生活となりました。思い返しても、「あの2年間は大変だった」という一言に尽きますが、今となっては「あの時のように、私もやればできるんだ」という自信につながった気がします。



また一方で、ABAI でお会いした日本の先生方に卒業後の進路をどのように決めていけばいい

か話を伺ってきたのですが、ある先生から発達障害児の言語形成を勉強してから日本に帰ってきた方がいいとアドバイスを受けました。(この時も懲りずに) 大学院卒業後は日本に帰るつもりでいたのですが、「アメリカで働く事は今しかできない!」と思い直し、ABA サービスが整っている州での求人に応募し始めました。しかし、卒業間近になってもめばしい返事をもらうことができず、ビザの関係もあり「最後、ここに応募して駄目だったらもう日本に帰ろう!」と思いながら応募したところからオファーを頂き、BCBA も取得し、現在もそこで働いています。

カリフォルニア州は、近年財政難によりサービスの内容や時間にも色々と制限がでてきてい

ますが、それでも UCLA の自閉症リサーチセンター (CART) や ABA が無償で提供されていたり (地域により若干の違いがありますが) と充実しています。ABAI にも 2007 年から参加していますが、日本からいらっしゃる学生さんや先生方とお会いする度に、「私も頑張ろう」と毎年いい刺激を受けています。アメリカに来た当初、簡単な単語さえ聞き取れなかった私がアメリカで就職するとは夢にも思っていませんでしたが、行けばどうにかなるさと始めた留学からもうすぐ 8 年目に突入しようとしています。ABA を学び始めて 4 年、まだまだ新米で子供達から学ぶことが多い日々ですが、とても充実した環境で仕事をしています。

自著を語る『人は、なぜ約束の時間に遅れるのか 素朴な疑問から考える「行動の原因」』

島宗 理

(法政大学)

本書はブログに書いた記事をまとめてササッと出版する予定だったのが、原稿メ切という〈約束の時間〉をタイトルそのまま何回も破った末、ようやく昨年夏に出版にこぎつけた新書です。かつて、友人で行動分析家の Bruce E. Hesse 先生が、論文がなかなか書けない状況を“便秘”に喩えたことがありましたが、本書を校了したときにはまさに長年溜め続けたモノが体内からどっと流れ落ちた感覚を覚えました。のっけから汚い喩えで申し訳ありません。

「人はなぜそのように行動するのか?」これは多くの人が心理学に興味を持つ理由の一つです。行動分析学という学問の究極的な目的の

一つでもあります。ところが、人々が日常的に抱く疑問と、私たちが研究室で取り上げる行動との間に大きなギャップがあるのも事実です。

- ・人はなぜ約束の時間に遅れるのだろうか?
 - ・人はなぜわがままを言うのだろうか?
 - ・人はなぜ傘を忘れるのだろうか?
 - ・人はなぜ騙されるのだろうか?
 - ・人はなぜ失敗を繰り返すのだろうか?
 - ・人はなぜ電車の中で他人をどついて進むのだろうか?
- などなど。

こうした素朴な疑問に行動分析学からガチで答えるのは困難です。ご承知のように行動分析

学では実験や実証を最重要視します。権威や憶測ではなくデータに語らせるという理念と、世や人のためになってこそナンボという実利主義的な価値観は、望月昭先生が巧みに表現されるように、優れた“業務用心理学”としての実績を作ってきました。このストイックさは誇るべき資産です。

とは言え、データがなければ何も言えない、わかっていることは推測してはいけないという極端なデータ至上主義に陥ってしまうと、本来はめちゃくちゃ広い懐をもつ行動分析学という学問の自由度が活かしきれません。人々が心理学に持っている期待やイメージからのズレも生まれます。

役に立つかどうかは別にすると、行動分析学以外の心理学の方が世の中の人々が心理学に寄せる期待には応えているかもしれません。人々は研究法や考え方よりも現象やトピックに興味を持ちがちですが、行動分析学が扱っている現象やトピックは今のところ相対的には狭く、限定されているからです。他の心理学よりも役に立つ回答ができそうなのにできないという現状に、いつもとても悔しく思っていました。

行動分析学は、実験的行動分析学、応用行動分析学、理論的行動分析学の三本柱からなることに、一応、なっています。“一応”と書いたのは、このことは行動分析家以外の心理学者にはほとんど知られていないし、行動分析学界でもストイックな行動分析家からは軽蔑されることさえあるからです。実際、ある雑誌にある論文を投稿したときに、ある著名な研究者からイラスト付きで「BS」（「牛の排泄物」のことです）とメモされた査読原稿を戻されて驚いたことがあります。昔の話ですが。

ところが、行動分析学の古典的な教科書である Keller & Schoenfeld の『Principles of

Psychology』、Skinner の『Science and Human Behavior』や『Verbal Behavior』には、実証的な研究やデータによる直接的な裏付けはほとんど見当たりません。基本的な行動原理を適用すれば、複雑な人間の行動はこのように理解できますよという解釈が中心です。発達に関する私の愛読書である Schlinger の『A Behavior Analytic View of Child Development』（邦題：『行動分析学から見た子どもの発達』）でも同じです。

これはどの学問領域でもそうだと思いますが、学問の本来の目的を達成するための随伴性と、学者の研究行動に影響している随伴性は必ずしも一致しません。発達や知覚や記憶の領域で行われている心理学の様々なトピックに行動分析学から挑むことは可能ですが、こうした新しく、未知の領域に踏み出して実験するよりも、昔なら強化スケジュールや対応法則、ついこの間までは等価性、応用なら自閉症や知的障害というように、論文になりやすい領域やテーマで業績を積み重ねる方が、研究者行動はより確実に強化されます。

本来なら『心理学研究』に載っている論文が扱うすべてのトピックが『行動分析学研究』でも扱われてもいいはずなのに、そうっていないのには、こうした理由があると私は考えています。

そこで、この本の執筆にあたっては、行動分析学の考え方をもとにした『視考術』を紹介する本という体（てい）にすることで、データがなく、推測に過ぎない解釈をまとめていくための、自分なりの“自由度”を確保しました。『視考術』は行動随伴性をダイアグラムに描き出して、行動と環境との機能的な関係性を目で見て考えられるようにする思考法と定義しました。本のオビになった「〈心〉に原因を求めるな！」

というフレーズは光文社の K 編集者のアイデアです。ちょっと言い過ぎかなと私でも日和りそうになるくらいの強烈な言い回しでしたが、本の中身はもっとマイルドなのでご心配なく。上述のような、行動の原因を〈心〉(性格や能力や感情などなど)ではなく随伴性に求める解明方法を図解入りで解説しています。

本書を読んでいたいただいた何人かの先生方からは、「徹底的行動主義の本ですね」と指摘されました。その通りです。「主義」を前面に押し出すと、読者にとってはハードルも上がるし、そもそも興味を持ってもらうことも難しいと想定さ

れたので、そのところは隠れたメッセージになっています。他にもいくつかのアイデアを仕込んでありますので、行動分析学家の方にはそれを見つける楽しみもあるかもしれません。

最後になりましたが、本書は一般書です。学術書ではありません。一般の方でも楽しんでいただける可能性がありますので、日常の素朴な疑問を行動分析的に考えてみることに興味をもってくれそうなご友人、ご家族、ご同僚の方々にご紹介いただけますと幸いです(光文社新書 2010年8月)。

「日本在住学生会員のABAI/SQAB 参加に対する 助成事業」(×切：3月末)

広報委員会

<応募資格>

1. 2011年5月に米国デンバーで開催されるABAI または SQAB に発表を申込み、受理された者。
2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。また、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABAI Expo, 同窓会 (reunion), ワークショップのみの参加者は応募できない。
3. 2010年10月1日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABAI/SQAB 参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABA が募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。

4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けた者も応募できるが、選考にあたっては、過去にこの事業による助成を受けていない者を優先する。

<助成額>

応募者の中から2名に対し、1名につき75,000円を支給する。

<提出書類等>

提出書類等の詳細は、必ず学会ホームページで確認して下さい。

<提出先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内 日本行動分析学会事務局
URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

編集後記

冬号のニューズレターを、予定日から少し遅くなりましたが、発行することができました。昨年も冬号の編集を担当しましたが、発行が3月10日付でしたので、少しだけ編集をスピードアップすることができました。

昨年の編集後記を読むと、冬号と言いつつ、発行された頃には既に事実上は春になっていたようです。今号は少しだけ昨年より早く発行できましたが、この編集後記を書いている段階では、やはりすっかり暖かくなっていて、何度も

「冬号」と書くべきところを「春号」と書いてしまいました。

今回は原稿がやや少ないですが、いずれも「研究会に出てみたい」、「研究論文を読んでみたい」、「海外で学んでみたい」、「本を読んでみたい」と思わせてしまう原稿がそろったように感じます。お忙しい中、原稿を執筆して下さいました皆様に感謝いたします。

なお、次の春号は5月末頃に発行予定で、担当は園山委員になります。(青山)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトにて公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学障害科学系園山研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
園山 繁樹
E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp